福岡女学院大学紀要　人文学部編　第31号
２０２１年３月

福岡女学院大学メディア・コミュニケーション学科における初年次教育の現在とこれから
―「振武寮」を教材とする意味を考える―

池　田　理知子

福岡女学院大学メディア・コミュニケーション学科における初年次教育の現在とこれから
―「振武寮」を教材とする意味を考える―

池　田　理知子

はじめに

福岡女学院大学人文学部メディア・コミュニケーション学科の初年次教育「入門ワークショップⅠ・Ⅱ[1]」は，2018年度より新たな教員の参加（筆者）を経て，カリキュラムのさらなる充実を目指してきた。本稿では，その取り組みがどのようなものであったかを報告すると同時に，2021年度以降の授業展開の可能性を模索する。

2018年度以前は，学生が「大学で必要とされる論理的な文章が書けるようになること」を目標にこの授業は行われてきた（二階堂・守山，2018, p. 267）。つまり，主として論理的思考を育むためのカリキュラム編成だったといえる[2]。それに加えて2018年度からは，批判的思考を養うことをもう一つの柱とし，さまざまな文章や映像による情報を批判的に読み解かせる内容のカリキュラムを導入した。では，その２本の柱を据えた授業が十分な成果を上げたといえるのだろうか。少なくとも筆者のクラスでは，とくに後者の柱に関しては改善の余地があるといわざるをえない。批判的な読みの先には，容易には答えが見いだせない「問い」が生まれるはずであり，そのような「問い」から答えを導き出せるような授業展開ができたとはいえないからだ。４年次の卒業研究を視野に入れて初年次教育を組み立てていく必要もあ

るだろうし，学生により深く考えさせる授業をするためには，すぐれた教材も必要となるだろう。ここでは，福岡女学院と関わりの深い「振武寮」がその教材の一つとなりうるかを考えてみたい。

「振武寮」については，一般的にもあまり知られていない。詳細は後述するが，そこは生還した特攻隊員を収容する施設で，福岡女学校（現・福岡女学院中学校・高等学校）の寄宿舎だった建物が使われていたという歴史がある。「軍神」と称えられていた特攻隊員たちがそこでどのような扱いを受けたのかを知れば，これまで当然だと思われてきた物語に疑問を抱き，批判的なまなざしを送らざるをえないだろう。また，キリスト教主義の学校が軍部に協力させられた事実と向きあうことにもなるはずだ[3]。「振武寮」を教材とする意味がどこにあり，それがどのような教育の質の向上をもたらしえるのかを探るのが，本稿における考察の主なものとなる。

1．批判的な思考を育むための授業実践――メディア・リテラシーの導入

前述したように，2018年度から取り入れた試みの一つが，さまざまな文章や映像による情報を批判的に読み解くというものであった。単なる文章や映像の読み解き方にとどまらない，より広い意味でのメディア・リテラシーについて学生に考えてもらうための授業を行ってきた。2020年度は後期でその内容を扱っている。詳細は各担当教員に任されていたため，それぞれのクラス[4]で異なるカリキュラムを組んでいたが，時事ワークシート[5]と同一テキストの使用，最終課題としてのプレゼンテーションの実施は，全クラス共通とした。テキストは，ドキュメンタリー映画監督で作家の森達也が書いた『たったひとつの「真実」なんてない――メディアは何を伝えているのか？』（2014）を使った。

ここからは，筆者の2020年度後期の授業内容について概説する。受講生は21人で，そのうちの１人が中国からの留学生であった。全体の流れを示すために，後期15回の授業内容を表１にまとめた。なお，2020年度は前期も後期

もすべて Google Classroom を使った遠隔での授業を行っている。

表 1　2020年度後期の授業内容

回数	内　　容
第 1 回	オリエンテーション
第 2 回	教科書・第 1 章（自分の眼で見ることの大切さ）
第 3 回	教科書・第 2 章（メディアは必要か？）
第 4 回	教科書・第 3 章（メディア・リテラシーとは？）
第 5 回	教科書・第 4 章（映像メディアを理解しよう 1 ／ 2）
第 6 回	教科書・第 4 章（映像メディアを理解しよう 2 ／ 2）
第 7 回	教科書・第 5 章（事実と嘘の境界線上にある，それがメディアだ）
第 8 回	プレゼンテーションの準備（課題の説明および情報の検索）
第 9 回	プレゼンテーションの準備（レジュメについて）
第10回	プレゼンテーションの準備（レジュメの作成）
第11回	プレゼンテーションの準備（レジュメの修正）
第12回	プレゼンテーション 1
第13回	プレゼンテーション 2
第14回	プレゼンテーションの振り返り
第15回	後期授業のまとめ

前述のテキストを中心とした授業を行ったのは，第 2 回から第 7 回までであった。テキストのなかから重要だと思われるポイントや，さらに考えてほしい内容を課題として提示する形で授業を組み立てている。

次に第 3 回の授業を例に，具体的にどのような内容を提示し，学生に何を考えさせたのかを説明する。なお，この回を選んだ理由は，「振武寮」をメディア・リテラシー実践のための教材として取り上げたからである。このときの授業の流れは表 2 に示したとおりである。学生は Google Classroom のストリーム上で教師からの指示を待ち，課題をこなしていくが，この授業ではオンライン通話ができる Meet も適宜使用している。Meet では，学生は音声と映像を OFF に設定し，教師からの呼びかけにはチャットで答える形で進めていった。ただし，学期末に行ったプレゼンテーションでは，音声を

ON にして発表させた。

表 2　第 3 回の授業の流れ（90分）

内　　容	時間配分
① 出欠の確認	5 分
② 時事ワークシートの問題を解かせ，提出	15分
③ 時事ワークシートの解答と解説を提示	5 分
④ Meet を使っての前回課題のフィードバック	15分
⑤「振武寮」についての資料と課題を提示	15分
⑥ ストリーム上での課題についての意見交換	10分
⑦「メディアは要約／加工する」について課題を提示し，提出	15分
⑧ 授業に対するコメントの記入と提出	10分

④の前回課題のフィードバックでは，第 2 回の授業の最後に示した課題（パワーポイントで作成，本稿の最後にある資料 1 参照）に対する学生からの回答をまとめた資料を Meet 内の画面共有機能を使用して提示し，それに解説を加えた。メディアで伝えられたことと自分の経験が大きく異なっていた事例を考えさせる課題に対して，100字程度で答えるように学生にはあらかじめ指示しておいた。また，授業時間内に課題が終わらずに提出できなかった場合は，その日のうちに出すようにと伝えておいた。

学生からの回答では，テレビやネットで紹介されていた商品を食べたり使ってみたりしたがイメージと異なっていたとか，テレビでの韓国報道と実際に現地に行って経験したこととの違いや，災害報道で近所が冠水していたのに特定の場所の被害しか報道されていなかったといった具体例があげられていた。報道内容を鵜呑みにせずに立ち止まって考えることの重要性を確認して，音声と資料の画面表示による Meet での「講義」を終了し，文字情報によるやりとりを中心とした「ストリーム」上での授業に移っていった。

⑤では，「『振武寮』の歴史を語り継ぐ」と題した，パワーポイントで作成した資料（本稿の最後にある資料 2 参照）を提示し，課題について自分の意見をまとめるように指示しておいた。資料の 1 枚目に URL を記載して学生

に読むように指示したネットの記事には，「振武寮」の歴史や現在の様子などが書かれている。２枚目には，「振武寮」の歴史を語り継いでいくためにはどうしたらよいと思うかを考えさせる課題を与えておいた。15分後に，Google Classroomの「ストリーム」内にスレッドを立ち上げ，学生が自由に意見を書き込めるように設定し，⑥の約10分間の意見交換を行った。その日は欠席者が１人いたので，出席した学生20人のうち16人が意見をあげてくれた。そのなかで，「振武寮」のことを聞いたことがあると書いた学生は１人だけだった。そのほかの具体的な意見の内容については，３節の「『振武寮』を教材とするための模索」で報告する。

次に，⑦で提示した課題（パワーポイントで作成，本稿の最後にある資料３参照）について説明する。そこでは，ニューズウィーク誌の表紙に使われたスポーツ選手の顔写真と，同じ人物の肌の色をより黒く見せるといった加工をすることで悪人イメージを強調させたタイム誌の表紙の写真（ここでは省略）を並べて提示し，これと同じように何らかの加工が施されたり，情報が省略されたりしたと思われる例をあげさせた。「大物」や「激」といった文字を使った大げさな表現がネットや週刊誌の記事では目立つとか，景色のよさを強調するために曇り空のはずなのに綺麗な青空に加工されたと思われるシーンがテレビの旅行番組であったなどの回答が学生から寄せられた。第４回の授業で，これまではあまり疑問をもつことのなかったであろうメディア情報にじっくりと向き合い，不自然な点はないかを考えてみる必要があるのではないか，前述した週刊誌の表紙の写真の比較からもわかるように，複数の報道を比較することでこれまでみえていなかった違いが浮かびあがり，その意味を考えざるをえなくなるのではないかといった内容を伝えた。

そして最後の⑧の授業に対するコメントの記入・提出をさせ，第３回の授業を終えた。その内容については，のちほど３節で言及する。ここでは，「振武寮」について述べていた学生が19人中12人いたということだけを記しておく。

現代の情報社会においては，メディア報道をそのまま受け入れるのではな

く，批判的に読み解く作業が重要になってくる。したがって，こうした内容を初年次教育に組み入れる意義は小さくない。ただし，より踏み込んだメディア・リテラシー教育になりえると思い，福岡女学院と関わりのある「振武寮」がどういう意味をもち，その存在をどう伝えていけるかを2020年度の筆者の授業で学生に考えさせようとしたが，知らなかった史実の確認だけで終わってしまった。筆者の提示の仕方に問題があったことは間違いないだろうが，それにしても「振武寮」はこの枠組みには収まりきらない教材なのではないかと感じた。この点に関しては，第３回の授業の反省点とともに，３節で詳述する。

２．「歴史」から学ぶ視点

２－１　「沖縄」の記憶の継承[6]

ここからは，なぜ初年次教育での教材として「振武寮」を考えるようになったのか，そのきっかけを理解してもらうために，沖縄キリスト教学院大学と琉球大学での「沖縄」を知る取り組みについて説明したい[7]。

最初に，沖縄キリスト教学院大学人文学部の初年次教育プログラム「フレッシュマンセミナー」の内容について述べる。１学部１学科のこの大学に入学した学生は，この授業を１年次に受講しなければならない。ある担当教員のクラスの2019年度の授業内容を表３にあげておく。担当する教員によって具体的な内容は異なり，かつ年度によってはスケジュールが変更される場合もあるようだが，表３の第３回と第４回の間に設けられている「オリエンテーションキャンプ」は毎年行われている。また，三代目学長である金城重明の著書『「集団自決」を心に刻んで』（1995）からの抜粋を読んで，キャンプへの準備をすることも全クラスに共通する内容である。

表 3　2019年度の授業内容

回数	内　　容
第１回	オリエンテーション・図書館ツアー
第２回	『「集団自決」を心に刻んで』の精読・要約
第３回	『「集団自決」を心に刻んで』の精読・要約
オリエンテーションキャンプ	
第４回	『「集団自決」を心に刻んで』の精読・要約
第５回	ノートテーキング（DVD『軍隊がいた島』の視聴）
第６回	論評文の作成①
第７回	論評文の作成②
第８回	ディベート①
第９回	論評文の作成③
第10回	ディベート②
第11回	論評文の作成④
第12回	ディベート③
第13回	ブックリポートの作成①
第14回	ブックリポートの作成②
第15回	ブックリポートの作成③
第16回	まとめ・ブックリポートの提出

＊第１～８回が前期，第９～16回が後期の授業。

「オリエンテーションキャンプ」は，渡嘉敷島の施設を利用しての２泊３日の研修である。そのなかでは，前述した金城による自らの戦争体験の講話と，集団自決跡地へのフィールドワークなどが行われている。沖縄の戦争の歴史を知ることの重要性が意識されたプログラムだといえよう。それは，初年次教育の通常の授業にもつながっている。たとえば，表３の第２～４回の精読・要約の教材に前述の金城の著書が用いられていることや，第５回にあるようにノートテーキングを学ぶ際の教材としてDVD『軍隊がいた島――慶良間の証言』（謝名元，2009）が使われていることからもいえるだろう。

次に，琉球大学教育学部国語教育専修での初年次教育プログラム「国語科基礎講読」での取り組みについて述べる。ここでの初年次教育プログラムで

は,「沖縄」をテーマにしたオムニバス形式の授業がなされており，沖縄の言葉や文学，舞踊などが取り上げられている。ここでも,「沖縄」が初年次教育を貫く柱となっていることがわかる。その多くが地元の教員を志望する,この専修分野の学生は意外と「沖縄」のことを知らないらしく，この授業が「沖縄」を知る貴重な機会になっているようだ[8]。

このように，沖縄キリスト教学院大学と琉球大学教育学部国語教育専修では「沖縄」を強く意識したプログラムを作っている。「沖縄」という地域の特性を大切にし，それを活かした教育がそれぞれの大学でなされているのである。特に，沖縄キリスト教学院大学では,「沖縄戦」と教育プログラムが結びついており，その歴史が自分たちの現在の生活とどうつながっているのかを学生たちは考えざるをえないのではないだろうか。

その地の特性を活かした初年次教育の在り方から学ばされ，福岡女学院大学では何ができるかを考えたときに思い至ったのが「振武寮」だった。もともと九州は、フィリピンや沖縄といった戦地へ出撃するための前線基地が多く、特攻の歴史と関連の深い地域でもあるからだ。次に，そこで何が行われていたかを説明する。

2－2「振武寮」という帰還特攻隊員の隔離施設[9]

アジア・太平洋戦争末期に始まったのが航空特攻作戦, つまり通常重さ250 kg の爆弾を装着した飛行機で敵の艦艇に体当たりするという戦法による攻撃であった。「パイロットは必ず“死ぬ・亡くなる”という『必死』条件の作戦[10]」であったことが知られているからか，あるいは知覧特攻平和会館[11]や大刀洗平和記念館[12]などに展示されている特攻隊員の遺影・遺書などの影響なのか，特攻について語られる際にはその作戦に参加して亡くなった人たちにスポットが当てられることが多い。一方で，さまざまな理由で生き残った人たちがおり，彼らが軍のなかでどのような扱いを受けたのかはあまり知られていない。

敵艦に体当たり攻撃を行うために出撃した特攻隊員の帰還は「あってはな

らないこと」とされていた。たとえ機体の不良などで戻ってきても，次の出撃に備えて待機を命じられ，再び搭乗することが義務付けられていた。ところが，1945年４月以降になると，整備員や部品の不足が深刻になってきたためなのか，整備不良などが理由で帰還する特攻隊員の数が増えてきた。その一方で，次の出撃のための代替機がすぐには用意できない状況にもなっていた。そのため，出撃基地である鹿児島の知覧の兵舎や町内の旅館，万世の宿舎では，「出撃意欲をなくした特攻隊員が群がって時間を潰していた」そうだ（林，2009，p. 7）。

博多駅前の旅館に宿泊していた帰還特攻隊員も同じような状況で，なんとか彼らを「隔離」しなければならないと考えた陸軍の司令部は，福岡市内の薬院にある福岡女学校（現・福岡女学院中学校・高等学校）の寄宿舎を接収し，そこに収容施設を設け，「振武寮」という看板を掲げて帰還特攻隊員の「再教育」を行ったのだった[13]。「振武寮」の史実を掘り起こしたジャーナリストで作家の林えいだい（2009）は，そこでは「特攻隊員の隔離・収容の目的があるので隊員の行動は制限され，外部との通信（手紙・電話）はいっさい禁止」（p. 8）されていたと著書に記している。また，「『生きて帰ったお前たちには，飯を食べる資格がない！』といって竹刀で殴りつけた」（pp. 8 - 9）り，「何故引き返してきたか，反省文を書けと要求」（p. 8）したりといった肉体的・精神的な暴力が日常的に加えられていたという。

図１　「振武寮」があった福岡女学校の寄宿舎
（福岡女学院資料室所蔵）

図１の写真は，当時の建物の外観である。戦後はその地に福岡市九電記念体育館（1964年開館）が建てられていたが，2019年３月で閉館し，2021年１月現在はその跡地でマンション建設が進んでいる。そこがどのような場所であったかを知るための手がかりになるようなものが残される可能性は，ますます低くなったといえる。

「振武寮」に関する正式な記録は，陸軍の資料には残されていない。また，軟禁されていた隊員たちが寮を去る際には，そこにいたことを他言しないようにと上官に命令されたという（大貫・渡辺，2018）。それでも戦後75年以上たった今では，「振武寮」について書かれたいくつかの書籍やドキュメンタリー映像などが入手可能である[14]。ただし，その史実を伝えるミュージアム／資料館などはない。したがって，「振武寮」の記録と記憶から何が学べるのか，それをどう伝えていくのかは社会的にも重要な課題となっている。

３．「振武寮」を教材とするための模索

初年時教育の教材として「振武寮」を取り上げようと考えはじめたのは，福岡女学院大学で学ぶ学生にとってそれは知らなければならない史実であり，なんとかそれを伝えたいとの思いがあったからだ。また，伝えるだけでなく，学生自身がメディアとなってその存在を広められる可能性を教えられないかとも考えていた。だからこそ，批判的思考を育むための一つの試みとして，１節で概説したメディア・リテラシー教育の枠組みで「振武寮」を教材として扱うのがよいと判断し，授業に取り入れた。

しかし，その後「振武寮」に関する文献などを読み進めると，この教材はその枠組みには収まりきらない広がりと奥行きがあることがわかった。さらに，今日的な問題とのつながりもみえてきた。たとえば，「振武寮」に軟禁された帰還特攻隊員への横暴な振る舞いをしたＫ元参謀に焦点をあててみる。彼は，戦後になっても元隊員たちから恨まれ，自身もそれを感じて怯え，保身用のピストルを80歳まで手放さなかった。その彼を現代の会社組織の一員

に置き換えて捉えなおすと，「パワハラ上司」に匹敵するのではないかとの加藤拓（2021）の指摘は的を射ている。当時の軍隊は日常的な暴力やいじめが横行し、上には逆らえない組織的構造があった。K元参謀も上層部からの無言の圧力があったからこそそのような振る舞いをしたのだろうし，今でも多くの会社組織がそうした構造を内包しているのではないだろうか（加藤，2021）。「振武寮」はそうした組織がもつ暴力性を象徴するようなところだったのだろう。このように，「振武寮」で起こった問題をハラスメントやいじめといった人権に関する普遍的な課題と結びつけて捉え直すと，初年次教育の教材としての価値がみえてくる。

「振武寮」の史実を伝え，どのように語り継いでいけるかという問いを投げかけて学生からの回答を求めた2020年度の授業では，その史実の今日的な意味が伝えきれなかったため，学生はこの問題を自分事として捉えきれずに終わったように思われる。そのときの学生からの回答では，学校の授業のなかで取り上げるべきだという意見がもっとも多く，16人中８人の学生が指摘していた。そのほか，「振武寮」の跡地に看板を立てるべきだとか，関係者に話を聞く機会を設けるべきだといった意見もあった。総じて，ありがちな回答で終わっており，自らがメディアとなって伝えていきたいという積極的な姿勢は感じられなかった。また，授業の最後に提出させたコメントでも，前述したように19人中12人が「振武寮」について触れており，そのなかでも７人の学生が身近なところにあった「振武寮」の存在を知らなかったことに驚きを隠せなかったとか，自分たちがその史実を知り，伝える努力をしなければならないと感じたなどと書いてはいたが，具体性に欠けるコメントであった。

2020年度の授業がこのような結果に終わってしまったのは，伝えるべき中身がそもそも何なのかを授業内で議論できていなかったからではないだろうか。「振武寮」が何を意味し，その存在とそこでの非日常性が私たちの日常とどのようにつながっているのかを，授業のなかで学生とともに話し合う必要があったはずだ。こうした議論があってこそ，容易には答えがみつからな

い「問い」が生まれ，その「問い」から「答え」に至るプロセスの重要性が教えられるのではないだろうか。それが，初年次教育では求められているに違いない。

おわりに

初年次教育担当者３人のうちの２人（筆者を含む）が関係していた，中島飛行機三鷹研究所[15]跡につくられた国際基督教大学では，大学正門前から礼拝堂まで続く約600メートルの直線道路を「マクリーン通り」という正式名称ではなく，「滑走路」と呼んでいる。実際に滑走路が戦時中にあったわけではないにもかかわらず，普段の会話のなかで在校生から新入生へとその名が代々伝えられていく。福岡女学院大学でも，当たり前のように学生が「振武寮」を知っているという環境をつくれないだろうか。

「振武寮」の存在が，福岡女学院で知られていないのはなぜなのか。『福岡女学院百年史』（1987）の編集委員長だった皆川が指摘したように，キリスト教主義の学校が軍部に協力した事実が話題にのぼるのを避けてきたからなのだろうか（注３参照）。皆川は，1993年11月発行の『福岡女学院時報』で，「振武寮の存在とその意義が公にされ，学院が知らない間に日本の歴史の重要な一面に関わっていたこと」がわかり，「このことは戦前戦中，女学院がキリスト教の故をもって苦しめられた歴史と合わせて覚えていかなければならない大切な歴史の一齣」（p. 15）だと述べている。皆川のこの指摘から20年近く経とうとしているが，「振武寮」の存在は忘れ去られようとしている。校舎の大部分が戦火にまみれ資料が残っていないから，戦前戦中の記憶を語り継げないわけではないだろう。わずかな手がかりからでも当時の出来事にたどりつけるはずであり，現に公的資料がなくても「振武寮」の記憶は口述記録として本や映像に残されている。

「振武寮」をはじめとした「特攻隊」の「真実」に目を閉ざすことは，日本の歴史においてもっとも命が軽く扱われていた時代の教訓を無駄にする行

為だといえないだろうか。現代のさまざまな問題を思いつくままにあげてみても，その根底には生命が軽んじられているという共通項が見出せるはずだ。「振武寮」が校内にあった史実を通して，「命」の重さについて学生とともに考えてみたい。

注

[1] Ⅰが前期，Ⅱが後期に行われている。

[2] 2018年度以前の取り組みについては，守山惠子と二階堂整（2015，2016）および二階堂と守山（2017，2018）を参照されたい。

[3] 『福岡女学院百年史』（1987）の編集委員長であった皆川範義（2007）は，『西南学院史紀要』に寄稿した文章のなかで，「戦時中やその前の時代を含め，如何にしてキリスト教主義の学校が軍部に協力させられたか，また協力したかを，たとえ学院の恥部であったとしても明らかにすることは大切と思う」（p. 50）と書いている。

[4] 2020年度のＡクラスは22人で守山，Ｂクラスは21人で筆者，Ｃクラスは20人で二階堂が担当している。

[5] 朝日新聞の記事に関する設問に答えるという教材。その使用の詳細については，注２の論文を参照されたい。

[6] この部分の執筆にあたっては，二階堂と守山の協力を得た。

[7] 筆者を含めた初年次教育担当者３人は，2019年度の「学院活性化推進助成金」を得て実施した教育活性化「学生の読解力不足対策のための基礎的研究」を行うために，札幌の北星学園大学と沖縄の沖縄キリスト教学院大学および琉球大学を訪問し，それらの大学で行われている授業の実態調査を行った。

[8] 注７にある実態調査での担当教員への聞き取りからわかった。

[9] この部分の記述にあたっては，林えいだいの著書『陸軍特攻 振武寮』（2009）を主として参考にしている。

[10] 知覧特攻平和会館のホームページ内の「航空特攻作戦の概要」より。http://www.chiran-tokkou.jp/learn/summary/index.html（最終アクセス日：2020年11月17日）

[11] 鹿児島県南九州市知覧町にある，「陸軍特別攻撃隊員の遺品や関係資料を展示」（「知覧特攻平和会館とは」の説明文より）しているミュージアム。http://www.chiran-tokkou.jp/about/heiwakaikan/index.html（最終アクセス日：2020年11月17日）

[12] 陸軍の特攻隊の中継基地であった太刀洗飛行場跡に建てられたミュージアム。太刀洗飛行場と特攻の関係については，ホームページに次のように記されている。「大刀洗飛行

場と特攻隊との関係はあまりよく知られていません。大刀洗陸軍飛行学校は本校と呼ばれ，後に特攻隊員となった多くの飛行兵が教育を受けました。特攻隊の基地として有名な鹿児島県の知覧は，大刀洗陸軍飛行学校の分校のひとつでした。大刀洗飛行場から直接出撃をした特攻隊もありました」。http://tachiarai-heiwa.jp/exhibition/c/（最終アクセス日：2020年11月17日）

[13] 『福岡女学院百年史』（1987）によると，「本校も軍の徴用するところとなり，わずか三教室を生徒用に残されただけで，他のすべての校舎（宣教師館は除く）校地は靖第一九五〇〇部隊（別称，靖部隊または第六航軍無線傍受隊という）の使用するところとなった。ここでは軍法会議も開かれ，営倉（隊内にある罪人の拘置所）も設けられていたという。ちなみに軍よりは借用代金として月額二千六百三十円（土地は無償，建物のみ）の支払いが約束された」（p. 206）とある。年史に「振武寮」という名称が明記されているのは『福岡女学院120年史』（2008）のみで，「本校は３教室と宣教師館を除き，軍が校舎の全部を徴用して，靖部隊（第６航空無線傍受隊）が使用することになった。また寄宿舎は，特攻隊帰還兵の収容所（軍は振武寮と呼んだ）として使用された」（p. 30）とある。

[14] 大学院時代から「振武寮」の問題を研究していた中日新聞記者の加藤拓の資料によると，『知覧』（高木，1965）で最初に「振武寮」が取り上げられたが，当時はそれほど注目されなかったらしい。その後，小説『月光の夏』（毛利，1993）が映画化され，「振武寮」の存在が知られるようになったという。そのほかの書籍に，『特攻の町・知覧』（佐藤，1997），『もう，神風は吹かない』（シュミット村木，2005），『陸軍特攻 振武寮』（林，2009），『特攻隊 振武寮』（大貫・渡辺，2009）があげられている。NHK 教育テレビの ETV 特集「許されなかった帰還」（2006年10月21日放送）では，「振武寮」に関する林えいだいの取材風景が収録されている。参考文献では，筆者が実際に使用した本を記載している。

[15] アジア・太平洋戦争中，特殊攻撃機やジェットエンジンなどの開発を行っていた（高柳，2015）。現在の東京都三鷹市にあった。

参考文献

大貫健一郎・渡辺 考（2018）『特攻隊振武寮――帰還兵は地獄を見た』朝日新聞出版

加藤 拓（2021年２月７日）「護身のピストル80歳まで」『中日新聞』朝刊５面

金城重明（1995）『「集団自決」を心に刻んで――沖縄キリスト者の絶望からの精神史』高文研

佐藤早苗（2007）『特攻の町・知覧――最前線基地を彩った日本人の生と死』潮書房光人社

謝名元慶福（監督）（2009）『軍隊がいた島――慶良間の証言』沖縄戦記録フィルム１フィート運動の会
シュミット村木眞寿美（2005）『もう，神風は吹かない――「特攻」の半世紀を追って』河出書房新社
高木俊朗（1995）『特攻基地 知覧』KADOKAWA
高柳昌久（2015）「中島飛行機三鷹研究所――その稼働期」『アジア文化研究』41，75-111
二階堂 整・守山惠子（2017）「小論文作成による日本語基礎力養成の試み：福岡女学院大学メディア・コミュニケーション学科における初年次教育の試み（４）」『福岡女学院大学紀要・人文学部編』27，115-127
二階堂 整・守山惠子（2018）「福岡女学院大学メディア・コミュニケーション学科における初年次教育の試み（５）」『福岡女学院大学紀要・人文学部編』28，267-284
林 えいだい（2009）『陸軍特攻 振武寮――生還した特攻隊員の収容施設』光人社
福岡女学院120年史編集委員会（編）（2008）『福岡女学院120年史』福岡女学院
福岡女学院百年史編集委員会（編）（1987）『福岡女学院百年史』福岡女学院
皆川範義（1993）「太平洋戦争末期の頃の女学院」『福岡女学院時報』77，15
皆川範義（2007）「『福岡女学院百年史』について」『西南学院史紀要』２，45-50
毛利恒之（1995）『月光の夏』講談社
森 達也（2014）『たったひとつの「真実」なんてない――メディアは何を伝えているのか？』筑摩書房
守山惠子・二階堂 整（2015）「福岡女学院大学メディア・コミュニケーション学科における初年次教育の試み（２）」『福岡女学院大学紀要・人文学部編』25，33-52
守山惠子・二階堂 整（2016）「福岡女学院大学メディア・コミュニケーション学科における初年次教育の試み（３）」『福岡女学院大学紀要・人文学部編』26，17-36

資料 1 ：課題～自分の眼で見ることの大切さ～

考えてみよう！

教科書の第１章では、著者の森達也が北朝鮮に行って、メディアでの報道と実際に経験した北朝鮮とのギャップを感じ、自分の眼で見ることの大切さを説いています。

みなさんは、メディアで伝えられたことと、実際に自分で経験したことが大きく異なっていたと感じたことはありませんか。自分の経験を振り返って、考えてみてください。

➤自分の考えを、「自分の回答」欄に書いて、「提出」してください。

資料 2 ：課題～「振武寮」の歴史を語り継ぐ～

「振武寮」と福岡女学院

教科書には、「戦争がどのように始まるかを語り継ぐこと」の重要性が書かれています。「始まり」だけではなく、メディアがあまり語ってこなかった史実をどう伝えていくかも大事なのではないでしょうか。

みなさんは、「振武寮」の存在を知っていましたか。それが福岡女学院の歴史と交差していることは、女学院の学生として知らなければならない史実だと思います。

まずは、下記の２つのURLにある記事を読んでください。

https://ohashilo.jp/event/sinburyou-3/

https://www.47news.jp/4758388.html

➤読み終わったら、次のページに進んでください。

考えてみよう！

みなさんは、「振武寮」の歴史を語り継いでいくためにはどうしたらよいと思いますか。放っておくと、どこにそれがあったのかさえ、忘れ去られてしまいそうです。

➤「ストリーム」で意見交換をします。用意ができたら、「ストリーム」で待っていてください。

資料 3 ：課題～メディアは要約／加工する～

より刺激的な加工

教科書57-62ページの「メディアは要約する」にもう一度目を通してみましょう。

最後の部分に注目してください。情報をわかりやすく要約するときに、より刺激的な加工が施されるのではないかと書いてあります。下記の二つの写真を比べてみましょう。これは、1994年にアメリカで起きた、アメリカン・フットボールのスタープレーヤーだったO・J・シンプソンが妻を殺害したとする事件に関するものです。裁判では無罪が確定しています。右の写真は、彼を「犯人」らしく見せるための加工がされたとして批判されました。

（写真は省略）

考えてみよう！

写真や映像に限らず、最近のメディアが流した情報を振り返って、わかりやすく伝えるために、情報が四捨五入されたのではないか、あるいは刺激的な加工がほどこされていたのではないかと思った例をあげてください。

➤思いついた例を、「自分の回答」欄に書いて、「提出」してください。